

令和七年二月

大学院文学研究科

高倉 明樹子 提出 学位申請論文（課程博士）

『源氏物語詠歌表現論』審査報告書

國學院大學

高倉 明樹子 提出 学位請求論文（課程博士）

『源氏物語詠歌表現論』審査要旨

論文の内容の要旨

高倉明樹子提出の学位請求論文『源氏物語詠歌表現論』は、『源氏物語』における和歌が詠まれる場面を対象として、和歌およびその和歌が詠出される物語表現を「詠歌表現」としてとらえ、とくに物語と和歌との連関に注目しながら分析することによって、詠歌をめぐる作中人物たちの人物造型や物語の表現世界のありようを明らかにしようとしたものである。『源氏物語』には七九五首の和歌が存するが、それらは作中人物たちが詠じるかたちで示されるため、その作中人物たちの詠歌行為とともに語られるふるまいや詠歌の方法、詠歌に至る状況や心情等をふまえることによって和歌の内容をより正確にとらえることとなる一方、和歌の内容をとらえることは、当該場面や物語展開をはじめ、

物語世界のあり方に対する理解をより深めることともなる。本論文は、こうした視座に立ち、和歌が詠まれる場面をどのようにとらえることができるのか、和歌によって詠者のどのような姿が明らかになるのか、さらに和歌が物語にはたす意義とはどのようなものかといった問題意識をもって『源氏物語』を論じたものである。

本論文は三篇十章からなり、序と結を付す。第一篇「贈与の詠歌表現」では贈与行為にともなう詠歌表現、第二篇「転換の詠歌表現」では物語の転換点にあたる場面における詠歌表現、第三篇「希求の詠歌表現」では対象を希求する詠歌表現がそれぞれ論じられている。

第一篇第一章「末摘花の山吹の桂——「玉鬘」巻「きてみれば」の歌との連関——」では、「玉鬘」巻において「山吹の桂の袖口いたくすすけたるを、うつほにて」とされる末摘花の「緑」をめぐる表現を対象として、それを光源氏の使者に授けたことの意味を論じ、「きてみればうらみられけり唐衣かへしやりてん袖をぬらして」という和歌に託されたものを考察しながら、山吹の桂が二十

年近く前に光源氏から与えられた山吹の装束を、末摘花が「禄」というかたちで光源氏に返却した行為であるとして、末摘花の人物造型をとらえなおした。同第二章「末摘花の祝儀の品―「行幸」卷「わが身こそ」の歌との連関―」では、「行幸」卷における「青鈍の細長」等に着目しながら、それらが玉鬘への祝儀の品であることを明らかにしたうえで、末摘花は、「わが身こそうらみられけれ唐衣君がたもとなれずと思へば」の歌の「君」に玉鬘と光源氏の両者を含ませ、玉鬘と光源氏への歌として詠んでいることを論じた。同第三章「源典侍と帯―「紅葉賀」卷「うらみても」の歌との連関―」では、源典侍が頭中将の帯を光源氏に届けた行為の意図と「うらみても言ふかひぞなきたちかさね引きてかへりし波のなごりに」の和歌との連関性を検討し、源典侍は頭中将の帯とわかつたうえで光源氏に送ったことを指摘した。

第二編第一章「姫君」を脱ぐ紫の上―「須磨」卷「浦人の」の歌を視点として―」では、「姫君」から光源氏の妻となった紫の上の転換が、「浦人のしほくむ袖にくらべみよ波路へだつる夜の衣を」の和歌にあるとしつつ、当該和歌

が、「葵」巻での光源氏からの後朝の歌「あやなくも隔てけるかな夜を重ねさすがに馴れし夜の衣を」への返歌として位置づけられていることを指摘し、装束の調製と後朝の歌の成立とによって、紫の上が名実ともに光源氏の妻となつたことを論じた。同第二章「光源氏と薫の齒——「横笛」巻「うきふしも」の歌を視点として——」では、筥にかじりつく薫の「齒」の描写の意義を多角的な視点から論じつつ、光源氏が詠みかけた「うきふしも忘れずながらくれ竹のこは棄てがたきものにぞありける」の歌には親としてのまなざしがあることを指摘した。同第三章「夕霧の「涙の玉」——「御法」巻「いにしへの」の歌を視点として——」では、紫の上臨終後の夕霧の姿が「涙の玉をばもて消ちたまひける」と語られることを起点として、紫の上の面影が「玉」に内在することを読み解き、夕霧が詠んだ「いにしへの秋の夕の恋しきにいまはと見えしあけぐれの夢」の和歌が、地の文の「ぞなごりさへうかりける」に連結することの意義について論じた。

第三篇第一章「薫の「身を分く」希求——「勾兵部卿」巻「おぼつかな」の歌

が意味するもの――」では、薫の「身を分けてしがな」という身の分裂を希求する姿が「おぼつかない誰に問はましいかにしてはじめもはても知らぬわが身ぞ」という和歌と響き合うものであることをふまえ、薫の孤独がもう一人の自分の出現を望ませたことを述べた。同第二章「朝顔の花手折る薫――宿木」巻「今朝のまの色のまの」の歌が意味するもの――」では、「宿木」巻において薫が「今朝のまの色にやめでんおく露の消えぬにかかる花と見る見る」の和歌を詠みながら手折った「朝顔」の意義を論じ、当該和歌における「朝顔」が中の君の比喻であることを指摘したうえで、「朝顔」を折る一方で「女郎花」を見過ごすことに薫の色好みの独自性が示されていることを論じた。同第三章「岩に座る薫――東屋」巻「絶えはてぬ」の歌が意味するもの――」では、岩に座る薫の姿が大君の魂を希求するものであり、そこで詠まれる「絶えはてぬ清水になどかなき人のおもかげをだにとどめざりけん」の和歌が亡き大君の魂に呼びかけた招魂の歌であることを論じた。同第四章「柱に歌を書きつける薫――手習」巻「見し人は」の歌が意味するもの――」では、「手習」巻において薫が宇治の邸の柱に書

きつける「見し人は影もとまらぬ水の上に落ちそふ涙いとどせきあへず」の和歌が、宇治への再来を希求するものであり、浮舟に固執する薫の執心の表れとなっていることを指摘した。

論文審査の結果の要旨

「源氏物語詠歌表現論」と題する本論文は、序において「和歌を詠む、あるいは作る過程と和歌そのものが、『源氏物語』が有する豊かな表現性によってどのように支えられて詠出されたのかを考究するもの」とされている。『源氏物語』には、引歌をはじめ、多くの和歌をふまえた表現があり、それがこの語文学の表現の特色ともなっているが、本論文はそうしたことを視野に入れたつ、とくに作中人物たちが詠じた和歌およびそれらが詠じられる場面に注目する。「詠歌表現」という術語については「和歌を構成する表現だけでなく、詠歌の過程において散文を支える表現、和歌の素材とはならないような言葉の

数々のことを含めて称する」としているが、本論文で照らし出されてくるのは、おのおのの作中人物たちが詠じた和歌のあり方およびそれらの和歌を詠じた作中人物のたちの心情やあり方である。『源氏物語』における七九五首の和歌が、個々の作中人物たちによってそれぞれの状況で詠じたものであるかぎり、それらについて考察することは、物語における人物造型や場面構造にとどまらず、物語の展開やその世界のあり方を考究することにほかならない。もちろん、歌を中心とした物語には『伊勢物語』などの歌物語があり、今後、そうしたものの関係についても考えられなければならないが、本論文の方法が『源氏物語』の表現世界を明らかにするために有効なものであることは認めることができる。「詠歌表現」という術語は、もちろんなじみのあるものではないが、今後学界において広く認知されるよう、さらなる研究の進展を期待する。

「詠歌表現」に着目する本論文は、物語における表現を丹念に読み込みことによって論を構築しているが、そうした方法は物語の新たな姿を照らし出してくることにつながっている。たとえば、第一篇第一章において「すすけたる」

山吹の袿を二十年近く前に光源氏から与えられた山吹の装束とし、「祿」というかたちで光源氏に返却したととらえたうえで、従来「をこ」者と評される末摘花を再評価する論は、そもそも物語世界において末摘花は「をこ」とされているのか、末摘花の変わらぬ心に気づかない光源氏をどのようにとらえるかという課題は残るものの、高く評価することができる。

表現の丹念な読み込みから物語世界を問い直すという方法は、第一篇第二章や第二篇第一章にも見られるが、たとえば、第二篇第一章において「須磨」巻における「浦人の」の歌が、「葵」巻での光源氏からの後朝の歌への返歌として位置づけられるとするのは、あまりにも時間的懸隔があり、婚姻の問題にもかかわって疑問を残す。また、第一篇第三章のように節ごとの分析がかならずしも論の展開に有機的に結びついてはいえないものや、第二篇第二章のように「齒」についての詳細な調査が論に生かされているとはいえないものも見られる。さらに、第三篇第三章における「紫の上を思慕する夕霧の「涙」の歴史は、数珠のように繋がっているのだった」という記述などやや抽象的になっ

てしまっている部分や、第三篇第二章における「薫は朝顔の花を折り女郎花を見過ごした」という記述など本文のことばに十二分に注意をはらいながら記述すべき部分も見られ、今後の課題となろう。

一方、本論文には、物語の表現に寄り添いつつも、民俗学等の周辺諸科学の研究成果を取り込みながら論じようとする姿勢も見られ、それが本論文の独自性をより顕著なものにしていると評することができる。そうした意味において、第三篇第三章と第三篇第四章は、本論文のめざすところを明確に示すものだといえるが、ただ、近年に書かれたものにおいてはそうした方向性がやや薄れているようにも見える。平安王朝文学とはいかなるものか、自身の用いている方法は研究史のなかでどのような意義をもつものかなど、つねに巨視的な視野をもちつつ、本文を構築しているひとつひとつのことばに十二分に配慮しながら調査分析を進めるという研究姿勢を堅持して研究を進めることが望まれる。

全体として、本論文の問題意識は明確であり、先行研究をふまえながら、緻密な調査分析により構築される論理展開は安定しており、研究内容に独自性を

認めることができる。

以上のことから、本論文の提出者高倉明樹子は、博士（文学）の学位を授与せられる資格を備えているものと認められる。

令和七年二月十七日

主査 國學院大學教授 竹内 正彦 ①

副査 國學院大學教授 野中 哲照 ①

副査 國學院大學学長 針本 正行 ①

副査 白百合女子大学名誉教授 室城 秀之 ①